

# 坂上大嬢の歌

瀬古 確

## 一

坂上大嬢は家持の妻となった人であり、その贈答歌も尽く家持との間のものばかりである。

彼女は越中在住時にも母への歌をさえ夫の家持に代作してもらっているほどだから、家持に贈ったものもどこまで彼女の作であるかは明らかでない。母の手も大分加わっているのではないかと思われるからである。

巻四で最初に見られるのは家持に報えた次の四首である。即ち

生きてあらば見まくも知らず何しかも死なむよ妹と夢にし見ゆる（巻四・五八一）

大夫もかく恋ひけるを手弱女たわやめの恋ふる情こころに比ひあらめやも（同・五八二）

つき草の移ろひやすく思へかもわが思ふ人の言も告げ来ぬ（同・五八三）

春日山朝立つ雲のぬ日無く見まくのほしき君にもあるかも（同・五八四）

なる四首であるが、家持の歌は載せられていないのである。

第一の歌については従来一句から二・三・四句までをとか、一・二・四句をそれぞれ家持の言葉——勿論夢の中での——とせられていたのに、沢瀉久孝博士は「死なむよ妹」だけを家持の言葉とせられている。勿論夢の中でも長い

言葉も見られる事はあるにしても、第一句から第四句までを当てるのは無理で、少くとも第三句の「何しかも」は末句の「夢に見えつる」に懸かっている作者の言葉と見なければならぬ。しかも「生きてあらば見まくも知らに」も家持の直接の言葉とするよりも、猶作者の不審を抱いたものとする方が、よく下の「何しかも」「夢に見えつる」と相照応して効果があるようである。私は注釈の説に従って家持の夢での言葉を「死なむよ妹」だけに限定したのである。

相聞歌に死の語を用いたからと言って直ちに死を将来しない事は自他共にとくと承知の筈である。

この歌にあつても死は初句の「生きてあらば」に対しているのはもとより、相「見」る事の出来ないために遂に死の語を敢えてしたものである。挽歌に於いて、死の語を拒絶して、その再生を願うのと、著しい相違である。

言い換えれば逢えないために死を口にしたのであり、相聞歌に於ける死の語は相見る事を期待しての導火線の役目を果しているものとも言えるであろう。

#### 坂上郎女の歌に

今は吾は死なむよわが背生けりともわれに寄るべしと言ふと言はなくに（巻四・六八四）

とあるのによつても、「死なむよ妹」の拠つて来たる所を示すと共に、夢の中の家持の言葉をそのまま引用するのなどは歌の巧者の母坂上郎女の助力を思わせるものがある。

第二首にあつては家持の歌に、大夫と思つてゐるのに貴女の事が恋しく思われてならないと言つた風の歌があつたのに対して答えたもので、大夫の恋に対して手弱女の恋のせつなさを歌つたものであるけれども、甚だ抽象的で真情の流露に乏しいのは残念である。この辺が大嬢の実力ででもあらうか。

猶タワヤメは原文では幼婦として用いられており、母の坂上郎女の怨恨歌（巻四・六一九）に同じ用字を見出だす

のも不思議である。

第三首に見られるつき草は露草（ほたる草とも言う）の事でこの花で摺った衣は移ろい易い所から「仮なる命」とか「移ろふ」に懸かるものである。例えば

内日刺す宮にはあれど鴨頭草の移ろふ情吾が思はなくに（卷十二・三〇五八）

百に千に人は言ふとも月草の移ろふ情吾持ためやも（同・三〇五九）

月草の仮なる命にある人を何に知りてか後も逢はむと言ふ（卷十一・二七五六）

朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の消ぬべき恋も吾はするかも（卷十・二二九一）

などの如く「移ろふ情」とか「仮なる命」とか「消ぬべき」などを導き出すのに用いられているのをみれば家持の心変りを案じたものである。

又「わが思ふ人」は

打日刺す宮道を人は満ち行けど吾が念ふ公はただ一人のみ（卷十一・二三八二）

味臈の住む渚沙の入江の荒磯松我を待つ子らはただ一人のみ（卷十一・二七五一）

などの歌の「吾が念ふ公」とか「我を待つ子ら」と全く同じで、ただ一人の人を指す事はもとよりである。

「つま」の夫にも妻にも広く用いられるのに対して、「人」も特定の対象に限って男にも女にも使われるのである。「うつろふ情」を歌うのも、「死」の語を敢えて使用するのと共に、相手の心をこちらへ引こうとする相聞歌の常套手段を用いたものに他ならないのである。

第三首にも、亦母坂上郎女の

思はじと言ひてしものをはねず色の移ろひやすき吾が心かも（卷四・六五七）

と類似する点を認めずにはおられないのである。

第四首の大嬢の歌に見える雲も

青山の嶺の白雲朝に日に常に見れども珍づらし吾が君（巻三・三七七）

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと我が念はなくに（巻三・二四二）

などと常にとかいつもとかを導き出すのによく使われる手法である。

次の家持に贈った三首（七二九―七三一）はその前に載せられた家持からの次の二首に和えたものである。

萱草<sup>わすれ</sup>吾が下紐につけたれど醜<sup>みにく</sup>の醜草言<sup>こと</sup>にしありけり（巻四・七二七）

人も無き国もあらぬか吾妹子と携ひ行きて副ひて居らむ（同・七二八）

なる二首の題詞の下には

離<sup>さか</sup>り絶えたる事数年にして復会ひて相聞往来す。

なる左註がついており、一時相聞往来の絶えていた事を物語っている。

家持の前の歌は忘れようと思つて萱草を身に著けてみても何の効果もない事を歎き、後の歌では人目人言を避けるために「人も無き国」へでもと願っているのであるが、共に一般の恋人の心の動きを詠んだものである。

この二首に対して大嬢も次の三首を以て之に和えている。

玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻きがたし（巻四・七二九）

逢はむ夜は何時もあらむを何すとかかの夕<sup>よ</sup>あひて言の繁きも（同・七三〇）

わが名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば惜しみこそ泣け（同・七三一）

即ち大嬢の第一首には

人言の繁きこの頃玉ならば手に巻きもちて恋ひざらましを（巻三・四三六）

と共にいつも対手を恋しく思っている自らを物語っているものであるが、玉と人とを対比させたり、「玉ならば」と「人なれば」との仮定条件と確定条件とを並べている所などにも、さきに挙げた夢の歌（五八一）に「何しかも」といぶかっているのと同じく、どこか理屈っぽさを否む事はできないであろう。

第二首は急に人言の繁くなつたのを歎いたもので、

君に因り言の繁きを古郷の明日香の河に潔身しに行く（巻四・六二六、八代女王）

淡海奥つ嶋山奥まけて吾が念ふ妹が言の繁けく（巻十一・二四三九）

直に逢はずあるは諾なり夢にだに何しか人の言の繁けむ（巻十二・二八四八）

浪のむた靡く玉藻の片念に吾が念ふ人の言の繁けく（同三〇七八）

人言の繁き時には吾妹子し衣にありせば下に着ましを（同二八五二）

などの如く人言の繁さを歌った例は非常に多く、恋の支障とせられた事は確かである。最後の歌の「衣にありせば」（二八五二）には大嬢の第一首「玉ならば」（七二九）と相通ずるものがある。

共に相見る事の出来ない対手をすぐ身近に置きたいものと願ったものである。

ついで大嬢の第三首は鏡王女の内大臣（藤原鎌足）に贈った歌

玉匣覆ふをやすみ開けて行なば君が名はあれど吾が名し惜しも（巻一・九三）

と名を惜しむ点で相似たものがあるけれども、王女の歌に気品の高さを感じると共に大嬢の歌には優しい女心の滲み出ているのを認めずにはおられないであろう。大嬢は何といつても心のやさしい女性であったと思われるのである。

これら三首の大嬢の歌に対して家持は又

歌の大娘坂上

今しはし名の惜しけくもわれは無し妹によりては千たび立つとも（巻四・七三二）

うつせみの世やも二行く何すとか妹に逢はずてわが独り寝む（同七三三）

わが思ひかくてあらずは玉にもが真も妹が手に巻かれむを（同七三四）

なる三首を贈っている。

家持の第一首はすぐ前の大娘の第三首目「吾が名はも」（七三一）を受けたものであり、家持の第三首も亦大娘の第一首「玉ならば」に和えたものである。この辺の所にも家持と大娘の二人の心のびったりと一致しているのを看取するに難くないであろう。

すると大娘は又

春日山霞棚びき情ぐく照れる月夜に独りかも寝む（巻四・七三五）

なる一首を家持に贈っている。ここでもすぐ前の家持の「わが独り寝む」（七三二）と関連させるのを忘れていないのである。

この歌にはお手本として母坂上郎女の

情ぐきものにそありける春霞棚引く時に恋の繁きは（巻八・一四五〇）

なる一首がある。

之に対して又家持の大娘に和した歌として

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足卜をそせし行かまくをほり（巻四・七三六）

なる一首が載せられており、前の大娘の「照れる月夜に」の歌にびったり対応させたものである事はもとよりである。

歌の嬢大上坂

すると又大嬢の方では次の二首を家持に贈っているのである。

かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君（巻四・七三七）

世間の<sup>よのなか</sup>苦しきものにありけらく恋に堪えずて死ぬべく思へば（同七三八）

これは第一首で家持の人言を気にしているけわいを見て「後も逢はむ」と慰めたものであり、第二首では自らの恋の苦しさを訴えたものである。

これらの歌を見て家持は

後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ（巻四・七三九）

言のみを後も逢はむとねもころにわれを頼めて逢はざらむかも（同七四〇）

なる二首を以て之に和えているのであるが、第一首は大嬢の第一首目の「後瀬の山」と第二首目の「死ぬべく思へば」を踏まえたものであり、第二首にも又大嬢の第一首目の「後も逢はむ」を第一首と同じに繰り返しながら、更に転じて「逢はざらむかも」と相手の心をゆさぶらずにはおかないのである。

万葉人が相聞歌に於いて死を敢えて口にするのは彼らの常套手段であるが、ここでは大嬢も家持も共に之を用いているのである。

もとより相手の心をこちらへ繋いでおこうとするものである事は言うまでもなく、実際の死を将来するものでない事は誰しも承知の上である。

これらの大嬢と家持との贈答歌はたまたまよく贈答歌の面目を示しているようである。互に贈歌を承けて答歌をものしている点はあたかも前と後とを繋ぐチェーンの役目を果して、次から次へと連っていつているようである。しかし相聞の贈答にあっては、前後の歌が互に密着しているのではなく、一部では之を承け他では之を転換しなければな

らないのである。ここにも耀歌会<sup>かがひ</sup>以来の男女の相聞歌の伝統があるのである。

これに続いて更に家持は次の十五首を大嬢に贈っている。しかしこれらの歌の一度に贈ったものでなく、時折贈ったものを此処に集めているようである。即ちそこには

相見ては幾日も経ぬをここだくも狂ひに狂ひ念ほゆるかも（巻四・七五一）

相見てはしましく恋はなぎむかと念へどいよよ恋ひましにけり（同・七五三）

などの如く逢った後の苦しさとか

暮<sup>ゆふ</sup>さらば屋戸開け設<sup>ま</sup>けて吾待たむ夢に相見に来むと言ふ人を（同・七四四）

夢にだに見えばこそあれ此くばかり見えずしあるは恋ひて死ねとか（同・七四九）

夢の逢は苦しかりけり覚<sup>おぼ</sup>きて搔<sup>か</sup>き探れども手にも触れねば（同・七四一）

などの如く夢を歌ってもいろいろの場合を挙げているからである。中には大嬢から贈られた歌の返歌と思われるものさえ含まれているのによっても、何度にも亘って大嬢に贈ったものである事は明らかである。又縫った袋を贈られて喜んだ歌（七四六）とか、下に着ている大嬢の形見の衣を詠んだもの（七四七）とかの見えるのも共に、これらの歌の何度にも大嬢に贈ったものを、ここに一括して載せたものである事を示している。

この十五首もの歌がすべて大嬢に贈られたものである事によっても、家持が大嬢に対して如何に深く心を傾けていたかを物語っているようである。

しかもこれらの歌には遊仙窟とか古事記に拠ったと思われるものの幾つか見られるのによっても、家持の熱意を窺うことができるであろう。

家持が才女と思われる笠女郎とか紀女郎とかにそれほど大きな心寄せを示さなかったのに、大嬢にだけ特に大き



な傾斜を示したのは如何なる理由によるであろうか。

大嬢は坂上郎女の子としてはさほど歌才には恵まれていなかったようだけれども、家持のために名の立つ事を歎いたり、袋を縫って贈ったりしている所にも、更に又夢の中で逢おうと歌った所などから見れば、思いやりのある温和な家庭的な女性であつたのではないかと思われてならない。

又久邇京で奈良の宅に残っている大嬢の事を思つて家持の歌つた

一重山隔なれるものを月夜好み門に出で立ち妹か待つらむ（巻四・七六五）

を聞いて藤原郎女の次の和歌を載せているのは面白いと思う。即ち

路遠み来じとは知れるものから然そ待つらむ君が目を欲り（巻四・七六六）

であるが、この作者藤原郎女の家持の親しい人であつた事を物語ると共に、家持の歌はその場で朗詠したものであり、藤原郎女も之を聞いてすぐ和したのがこの一首である。

この時代には既に歌は紙に書いて相手に伝えられるようになっていたとは言え、又一方では家持と藤原郎女との歌のようにその場で唱和する事も行われていた事を示すものとしてわれわれの興味を引くものがある。

勿論家持は久邇京から京の留守宅の大嬢に歌を贈った事は

都路を遠みか妹がこの頃はうけひて宿れど夢に見え来ぬ（巻四・七六七）

今知らず久邇の京に妹に逢はず久しくなりぬ行きて早や見な（同七六八）

などの二首の見える事や、

人眼多み逢はなくのみそ情さへ妹を忘れて吾が念はなくに（巻四・七七〇）

を初として五首の歌を大嬢の許に寄せているのによつても明らかであるが、大嬢の和歌は共に見られないのである。

この頃の家持は紀女郎とも盛に歌の贈答を行っており、作歌態度にも積極的なものがあるようである。今までに挙げたものの他、巻八に見えて大嬢より家持に贈ったものとしては

吾が蒔ける早田わさだの穂立造りたる藪やぶを見つつ偲はせ吾が背せ（巻八・一六二四）

なる一首があるばかりで、他はすべて家持からの歌だけで大嬢の返歌は見受けられない。

この歌は稲の藪やぶに添えられたもので、家持もこれに報えて

吾妹児が業と造れる秋の田の早穂わさの藪見れど飽かぬかも（巻八・一六二五）

なる一首を贈っている。

この他巻八春相聞には家持の大嬢に贈ったものとして

吾が屋外やどに蒔まきし瞿麦なすしこ何時なしかも花に咲きなむなそへつつ見む（巻八・一四四八）

なる一首がある。

又夏相聞には橘の花を大嬢に贈った長反歌（巻八・一五〇七——一五〇九）を載せており、「清き月夜に」「ただ一眼」でも妹に見せるまでは散らさないようにと見守っていたのに、追っても追っても霍公鳥が暁方に何度も来ては「徒らに」散らしてしまいうので、大嬢に見せようと折ったものと歌っている。大嬢の返歌は見当らない。

更に秋相聞では大嬢が稲穂の藪を贈って二人の間に歌の贈答の行われた事は既に述べたが、之にすぐ続いて大嬢は又身に著けた衣を家持に贈っているが歌は一首も添えていない。

ただ家持の之に報えた歌が載せられている。

秋風の寒きこの頃下に着む妹が形見とかつも偲はむ（巻八・一六二六）

形見は亡き人の場合にも生きた人の場合にも用いられている。衣は形見として男から贈られる場合もあった事は湯

原王と娘子との次の贈答歌によつても明らかである。即ち

吾が衣形見に奉る敷妙の枕を離けず巻きてさ宿ませ（巻四・六三六、湯原王）

吾が背子が形見の衣妻問ひに我が身は離けじ言問はずとも（同六三七、娘子）

などを見ても王からその衣を娘子に贈ったのであるが、話しはしてくれなくても娘子は王の衣を身に離さずにいるのである。

衣は又女から男に贈られる事もあつて、中臣宅守の弟上娘子への歌の中にも

吾妹子が形見の衣なかりせば何ものもてか命継がまし（巻十五・三七三三）

なる一首もある。これは宅守の配所への悲しい旅に上った時の作だから次の娘子の歌に

逢はむ日の形見にせよと手弱女の思ひ乱れて縫へる衣そ（同三七五三）

とあるのは、或いは宅守のために新しい衣を縫って贈ったものであるうか。或いはこの歌は宅守の上道歌のすぐ次にあるので、宅守の歌に対して娘子の和えたものとも考えられるようである。家持自身も大嬢に贈った十五首の中にも

吾妹子が形見の服下に着て直に逢ふまでは吾脱がめやも（巻四・七四七）

なる一首をものしている。但し同じ時のものか——多分別の時のものと思われるが——どうかは明らかでない。

このように互にその衣を相手に贈つてはそれぞれの形見として之を重んじたものであるが、形見の品は必ずしも衣服だけに限らないのである。

或いは松の木とか藤浪秋芽子などが対手を偲ぶ形見のものとして歌われているのである。即ち

君来ずは形見にせむと我が二人植ゑし松の木君を待ち出でむ（巻十一・二四八四）

恋ひしくは形見にせよと吾が背子が植ゑし秋芽子花咲きにけり（巻十・二一一九）

恋しければ形見にせむと吾が宿に植ゑし藤浪今咲きにけり（巻十・一四七一、山部赤人）

などの如く、第一首は松を形見としながら松から「君を待ち出でむ」に転じており、第二首にあつては、形見の秋芽子の咲いた事によって、一入背の君を念わずにはおられないのである。

第三首は赤人の作で、藤の花によってその佳人を偲ぼうとしているのである。

このように藤とか萩の花によって思う人を偲ぶばかりでなく、待つと普通の松の木によって、背の君を此処に再び迎えようとする者もあつたのであるが、衣は特に身に著けるものであるために、又いつでもどこでも対手を偲ぶ事が出来るために、互にそれを着る事を好む風習があつたようである。

しかも形見の品も二人にだけしかわからないようにして、人に知られないようにするのがよいとせられた事は中臣宅守の狭野弟上娘子に贈った次の歌によつても之を推察する事ができるであらう。

まそ鏡かけて偲へとまつり出す形見のものを人に示すな（巻十五・三七六五）

なる歌の「まそ鏡」は「かけて」を起す枕詞にしても、猶形見の品のそれである事を隠しているのかも知れない。それにしては續いての歌に

うるはしと思ひし思はば下紐に結ひつけ持ちて止まず偲はせ（同三七六六）

とあつて、いくら小さなものにしても下紐に結びつけていつも持っているのには鏡は適當でないようである。

この場合はとにかく二人にだけわかつていて、他の人にはそれと知られないものであるだけに、形見としての効果は一層發揮せられた筈である。

此の他家持の大嬢に贈ったものとしては、同じ秋相聞に非時の藤の花と芽子の黄葉とを贈った歌、

我が宿の非時藤の珍しく今も見てしか妹が咲客を（巻八・一六二七）

我が宿の芽子の下葉は秋風も未だ吹かねばかくそもみてる（同一六二八）

などの見えるばかりでなく、大嬢を念ふ長歌（一六二九）をものしては

高円の野辺の容花<sup>かほ</sup>面影に見えつつ妹は忘れかねつる（巻八・一六三〇）

なる反歌一首を添えているのであるが、大嬢を容花に比している所にも、彼女の可憐な女性として家持の目に映っていた事は確かであろう。

更に安倍女郎に贈った家持の歌

今造る久邇の京に秋の夜の長きにひとり宿るが苦しさ（同一六三一）

の一首に続いて同じ久邇京から奈良の宅に留っている大嬢に贈った歌一首

足ひきの山辺に居りて秋風の日にけに吹けば妹をしそ念ふ（同一六三二）  
が見受けられるのである。

同じ久邇京から或いは安倍女郎に或いは大嬢にとつづいて歌を贈っているのも、当時家持の何人かの女性と歌の贈答を行っていた事を物語っている。しかも同じく巻四にも久邇京から奈良の宅に留まっている大嬢に贈った歌（七六五）のあるのと共に、山口女王をはじめ笠女郎・紀女郎・中臣女郎・大神女郎・娘子・童女等と家持との贈答をも同じ巻には収めており、巻八と共に同じ時代の家持を繞る多くの女人に接する事ができる。

しかし家持が一番多くの歌を贈り、その伴侶と定めたのは坂上大嬢であった。彼女は母の坂上郎女の子としては歌才に恵まれなかったようで、或いは母の手の加わったと思われるもののある事は既に述べた通りである。

しかし彼女が家持の心を把えて離さなかったのはその人柄のやさしさにあったのではなからうか。その歌才から見れば紀女郎とか笠女郎等の見られる中で、遂に坂上大嬢一人に傾いて行った家持も控え目なやさしい彼女の姿に引か

れたものと考えられるのである。

二

大嬢は家持から愛されたばかりでなく、母の坂上郎女からも鍾愛せられた事は彼女に贈られた母郎女からの歌によつても之を窺う事ができるようである。即ち坂上郎女の気持は跡見の庄から宅に残っていた大嬢に贈った長短歌にも常世にと 吾がゆかなくに 小金門に もの悲しらに 思へりし 吾が子の刀自を ぬばたまの 夜昼と云はず 思ふにし 吾が身は瘦せぬ 歎くにし 袖さへぬれぬ かくばかり もとなし恋ひば ふる里に この月ごろも ありかつましじ (巻四・七二三)

朝髪の思ひ乱れてかくばかり汝姉が恋ふれそ夢に見えける (同七二四)

と歌っている所にもよく示されているようである。「小金門にもの悲しらに思へりし」と吾が子の姿を胸に描いては、瘦せる思いで悲しんでいるのであるが、その人柄のやさしさが母郎女からも特に愛せられたものであろう。

この歌の左註に

右の歌は大嬢の進れる歌に報へ賜れるなり。

とある所に拠れば、大嬢から母へ贈ったのに対する返歌と思われるけれども、大嬢の歌の見当らないのは残念である。

坂上郎女は竹田の庄からも大嬢に歌を二首贈っている。即ち

うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間無く時無し吾が恋ふらくは (巻四・七六〇)

早河の瀬に居る鳥の縁をなみ思ひてありし吾が子はもあはれ（同・七六一）

などの歌であるが、ここにもよく頼り所もなく悲しげにしている様を「早河の瀬に居る鳥」によって巧みに描き出されている。

後髪を引かれるような大嬢の態度が母の郎女にはいとしく思われたに違いない。

吾が子に贈る歌にもとかく相聞的な発想をするのが当時の常であった。

更に郎女は越中に下った娘の許にまで長歌短歌を贈っている。即ち

（上略）沖つ浪 撓む眉引 大船の ゆくらゆくらに 面影に もとな見えつつ 斯く恋ひば 老いづく吾が身  
けだし堪へむかも（卷十九・四二二〇）

斯くばかり恋しくあらばまそ鏡見ぬ日時なくあらましものを（同・四二二一）

などの歌を見れば、眉引の美しい——郎女もそうだったらしいが——やさしい娘を年老いてから遠い越中の地にやってしまっている郎女としては、堪えられない淋しさであつたに違いない。それだけ母に取っても忘れられないよい娘だつたと思われるのである。

郎女の枕詞や序詞にとかく鏡とか髪とかの用いられているのも如何にも女らしい修辭と言ふべきである。

家持は又妻のために京の母坂上郎女の許に贈るために次の長反歌を代作している。

霍公鳥 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘の 香ぐはしき 親の御言 朝暮に 聞かぬ日まねく 天離る 夷にし居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を 外のみ見つつ 嘆くそら 安けなくに 思ふそら 苦しきものを 奈呉の海人の 潜き取るとふ 真珠の 見がほし御面 直向ひ 見む時までは 松柏の 栄えいまさね  
尊き吾が君（卷十九・四一六九）

白玉の見た欲し君を見ず久に夷<sup>ひな</sup>にし居れば生けるともなし（同・四一七〇）

ここでは霍公鳥と橘とを配して如何にも家持好みの風流の一端が見られるようである。

花橘から「香ぐはしき親」と続けたのは、真珠から「見がほし御面」とあるのと共に美しい表現であるが、特に後者は女性好みのものであって、大嬢から母の坂上郎女に贈るものとして相応しいであろう。

大嬢は人から好かれるやさしい性質だったらしく、母や夫の家持から愛されたばかりでなく、異腹の姉田村大嬢からも九首の歌を贈られている。田村大嬢の歌は尽く坂上大嬢に贈ったものばかりなのを見ても、如何に彼女が坂上大嬢を愛していたかを物語るものと言えるであろう。その歌は

a 大伴田村大嬢坂上大嬢に贈れる歌四首（巻四・七五六―七五九）

b 大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌一首（巻八・一四四九）

c 大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌一首（同・一五〇六）

d 大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌二首（同・一六二二―一六二三）

e 大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌一題（同・一六六二）

の五回に亘って巻四と巻八に載せられている。

a には

外に居て恋ふるは苦し吾妹子を継ぎて相見む事計せよ（巻四・七五六）

遠からば佗びてもあらむを里近く在りと聞きつつ見ぬが術なさ（同・七五七）

白雲の棚引く山の高々に吾が念ふ妹を見むよしもがも（同・七五八）

如何ならむ時にか妹を<sup>よもぎふ</sup>葎生の<sup>きた</sup>穢なき屋戸に入り坐せなむ（同・七五九）



の四首から成っており、

右田村大嬢と坂上大嬢と、并にこれ右大弁宿奈麻呂卿の女なり。卿田村の里に居れば、号を田村大嬢と曰へり。但妹坂上大嬢は母坂上の里に居り、仍りて坂上大嬢と曰へり。時に姉妹諮問し歌を以て贈答す。なる詳細な左註がある。他の例を併せて考えると家持の手になるものの如くである。

第三首に見られる「たかたかに」は他にも

高山にたかべさ渡り高高にわが待つ君を待ち出てむかも（巻十一・二八〇四）

石上振いそのかみふるの高橋高高に妹が待つらむ夜そ更けにける（巻十二・二九九七）

豊国の聞きこの高浜高々に君待つ夜らはさ夜更けにけり（巻十二・三二二〇）

などの如く好んで上に序を伴っており、男女の相聞歌——特に民謡的な作品に多く用いられている——に見られるようである。その他の三首にしても何れも男女間の恋愛発想と全く同様である事は坂上郎女が大嬢に与えた歌の場合と同じである。

即ち第一首の「繼ぎて相見む事計りせよ」（巻四・七五六）第二首の「在りと聞きつつ見ぬが術なさ」（七五七）

第四首の「穢きたなき屋戸に入り坐せなむ」（七五九）などと、何れも恋愛発想によらないものはないのである。うっかり之を表面的に考えると、坂上郎女と家持との間にも恋愛関係があったかの如き議論も行われるけれども、これは当時の相聞歌とか贈答歌とかを見誤ったものに外ならないのである。

この事はb c dの歌に就いても全く同様であって、bの

茅花抜く浅茅が原の壺董今盛りなり吾が恋ふらくは（巻八・一四四九）

にしても、同じ巻の高田女王の作

山振の咲きたる野辺の壺重此の春の雨に盛なりけり（同・一四四三）

を相聞歌に転じたものであり、cの

故郷の奈良思の岳のほととぎす言告げやりし如何に告げつや（同・一五〇六）

の如く霍公鳥に托して自らの思いを坂上大嬢に贈った歌にしても同様である。更にdの

吾が屋戸の秋の萩咲く夕影に今も見てしか妹が光儀すかたを（同・一六二二）

吾が屋戸に黄変もみつ鶏冠かえりて木見るごとに妹を懸けつつ恋ひぬ日はなし（同・一六二三）

の如く何れも萩とか鶏冠木の黄葉によって妹を思わずにはいられないのであり、男女間の恋愛のムードと何ら変る所はないのである。

更に最後のeの歌

沫雪の消ぬけべきものを今までにながらへ経るは妹に逢はむとそ（同・一六六二）

にあっても「消ぬべきもの」と言つて死を表に出している所にも、男女間に用いられる恋愛歌と全く変りはないのである。

相聞歌において死を意味する言葉を好んで用いているのはその著しい特色であるが、挽歌にあつてはきびしくこれらの語を拒否して死者の復活を祈るような表現につとめているのを思う時、万葉人の相聞歌に於ける死の語の繁用は相手の心を自らに繋ぎ止めておこうとする儚い彼等の表現上の工夫だったに過ぎないのである。

「消ぬべく」とか「消易き」は古今集・新古今集にあつても、好んで用いられる用語であるが、万葉集の相聞歌にあつても、一方に死の語の敢えて用いられるのと共に、「消」も亦慣用的に好んで用いられているのである。即ち

朝霜の消やすき命誰がために千歳もがもと吾が思はなくに（卷七・一三七五）

春されば水草の上に置く霜の消つつも吾は恋ひわたるかも（巻十・一九〇八）

秋芽子の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出めやも（巻八・一五九五）

夕置きて旦は消ぬる白露の消ぬべき恋も吾はするかも（巻十二・三〇四〇）

朝な旦な草の上白く置く露の消なば共にと言ひし君はも（同・三〇四一）

思ひ出づる時はすべなみ佐保山に立つ天霧の消ぬべく思ほゆ（巻十二・三〇三六）

高山の菅の葉凌ぎ零る雪の消ぬとか言はも恋のしげけく（巻八・一六五五）

一眼見し人に恋ふらく天霧らし零り来る雪の消ぬべく念ほゆ（巻十・二三四〇）

思ひ出づる時はすべなみ豊国の木綿山雪の消ぬべく念ほゆ（同・二三四一）

朝咲き夕は消ぬる鴨頭草の消ぬべき恋も吾はするかも（同・二二九一）

などの如く、霜を初めとして露・霧・雪・鴨頭草等の消え易いものを枕詞とか序詞として接続しているのが見られるのであり、同じような発想の行われている所にも民謡的な色彩が濃厚である。

又一方では彼らが相聞歌に好んで用いた死の語と熟して

秋芽子の上に置きたる白露の消かも死なまし恋ひつつあらずは（巻八・一六〇八、巻十・二二五四）

秋の穂をしのに押し靡べ置く露の消かも死なまし恋ひつつあらずは（巻十・二二五六）

秋芽子の枝もとををに置く露の消かも死なまし恋ひつつあらずは（同・二二五八）

などと用いられているものもあり、古今集好みの表現と万葉風の表現とを折衷したもののさえ既に見受けられるのである。

此処には万葉の「死」の表現から、古今の「消」へと変化して行く過渡の姿を見せているものとした方が、猶適切

と言うべきであろうか。

「消ゆ」はいかにも儚なげで、上におかれた霜・露・霧・雪などとよくマッチした如何にも古今人好みの表現と見るべきであるが、万葉集にあってもその準備の着々と行われていた事を見る思いがして興味深いものがある。

田村大嬢から贈られた歌はすべて一方的であって、坂上大嬢からの返歌と覚しきものは一首も見受けられない。

しかしそれだけ坂上大嬢は夫家持からはもとより、母の坂上郎女からも、更に異母姉の田村大嬢にさえ愛されたのを思えば、女人万葉の中でも最も幸福な人であったと思われるのである。

それだけに坂上大嬢はやさしい美しい女性だったたに違いないであろう。

付 記

これは目下執筆中の「女人万葉」の一節である。(昭和四十八年一月十日)